この人を訪ねて＃226

卓球にかけた青春時代

公益財団法人 広島市スポーツ協会
広島市西区スポーツセンター　第十八代 館長
末 廣 令 子（すえひろ れいこ）さん 59歳

福岡大学在学中、オリンピック選手石川佳純さんの同級生だった両親と共に卓球に情熱を燃やした。卒業後、実業団岐阜・十六銀行で卓球全日本ランキング7位につけるも、体調を崩し帰広。広島市で開催されたアジア競技大会（1994年）に出場する選手育成に尽力した。

熱心に口説かれた

西日本卓球大会が、1988年（昭和63年）山口・柳井市で行われたとき、「あなたを追いかけて来たんです」と、広島市卓球協会事務局長の戸口田氏から突然言われた。

「広島の卓球は弱い。2年後のアジア競技大会、そのあと開催される広島国体に向けて、何とか強い広島にしたい。ぜひ指導者として広島に帰ってこないか」と熱心に口説かれた。（中国新聞掲載記事の一部参照抄）

そのころ末廣令子（旧姓高草）さんは、大学卒業後、岐阜県にある実業団十六銀行に勤務し、卓球部に所属。給料、遠征費等が保証され、それなりの実績を出しており、ただひたすら自分のためだけに卓球に打ち込めばよいのに、今後は広島の卓球のレベルアップのために活動しなければならない。

はたしてこれからの〝自分の卓球〟はどうなるのか。末廣さんは悩んだ。後述する体調のこともあって、申し出を受け入れ、銀行を退職し、1989年（平成元年）広島市へ移った。

中学から卓球を始める

1963年（昭和38年）に生まれた末廣さんは、国鉄職員だった父の転勤で岡山、福山と転々とした。3才上の姉の誘いもあり、福山市内で卓球が強かった中学入学から卓球を始めた。高校は福山市から離れた県立松永高校を選んだ。強い先輩たちがおり、全国を狙う高校だった。末廣さんは高校2・3年インターハイ ダブルスベスト8、高校3年県インターハイ予選 個人優勝、ダブルス優勝。市が国体少年の部 県ベスト4の成績。

「石川佳純選手」の両親と同級生

大学は1982年、博多・福岡大学体育学部に入学。福岡大学の卓球部には、偶然にも数十年後あのオリンピック選手になる「石川佳純選手」の父公久さん、母久美さんが同級生として在籍していた。久美さんとは1年生からダブルスを組んで試合に出ていた。大学時代の成績は、1～4年生 全九州学生卓球選手権大会＝シングルス優勝。3・4年生西日本学生卓球選手権大会＝シングルス優勝。4年生で西日本卓球選手権大会＝ダブルス優勝。

英才教育のたまものか

末廣さんいわく、「石川さんたちは4年生のとき、お二人は将来を誓った仲だった。久美さんは左利きでエキゾチックな顔立ち、公久さんは、右利きでとても頭のいい方だった」と。二人は結婚後、公久さんの転勤で山口市へ。1993年（平成5年）に長女石川佳純さんが生まれた。彼女は小学校上がる前から卓球をはじめた。その才能を認め、屋内に練習場をつくり、母久美さんが卓球の英才教育をしたという。輝かしい戦績を残した石川選手（30才）も、今年5月現役を引退した。

◆卓球（Table Tennis）について◆

▼2人（または2組のペア）のプレーヤーがテーブルを挟んで向かい合い、ボールを交互にリターン（返球）し合い、相手がリターンできないようリターンしたものが得点とする。▼卓球の対戦相手間は3m程度で近く、相手の表情や手指などの細かな動きが観察可能。心理的な駆け引き、メンタルも勝敗に大きく影響することから、「究極の対人競技」ともいわれる。体力、知性の双方がもとめられる。▼1880年代中世のテニスゲームをもとにイギリスで考案された。球がコルクからセルロイドに変わったころ、打つ音から「ピンポン」と呼ばれ、瞬く間にヨーロッパ諸国に普及した。▼日本へは1902年に東京高等師範学校の教授が、フランスから用具一式持ち込み国中に広まった。（ウキペディア参照抄）

実業団リーグの銀行に就職

大学を卒業して、末廣さんは岐阜県にある十六銀行に就職。「頭取が卓球が好きで、実業団リーグ一部に所属。野球やラグビーのようなお金がかからず、企業の広告塔になる卓球を選ばれたのでしょう（笑）」。

「銀行の仕事は基本的には3時まで。それから、夜8時まで練習。強化合宿で日本各地へ。韓国や台湾、インドネシアでアジアカップ国際大会に出場。1988年のソウルオリンピックで、チームメイトが出場したため、練習相手で同行しました」。

この間の成績は、1987年 全日本卓球選手権大会では、シングルスベスト16位。全日本ランキングは堂々の7位。

拒食症になった！

しかしここで、末廣さんに異変が起こった。拒食症になったのだ。焦りもあったのだろう「お金（給料）をもらっての練習の日々、夢は全日本優勝なのに、期待した成績が出ない、瞬発力をつけるため朝晩での走り込みをするも…。お金をもらってこのままでいいのか。相談するトレーナーもいない。チームメイトも心配し、あれを飲め、これを食べろというが、戻してしまい、体が受け付けない。体重も48kgから10kg近くも減ってしまいました」と苦しかった当時を振り返る。

入社して3年が経とうとしていた。家族からも福山に帰って来なさい、私立女子高校の体育教員へとの話があったが、先生になる気力もなかった。ちょうどそのころ、冒頭に記したアジア競技大会向けの選手養成話があり、市の体育振興事業団へ嘱託として手伝ってほしいとの誘いだった。

苦しんだ拒食症は嘘のように消えた。

退職し、広島市に移り1989年に現在の公財法人広島市スポーツ協会に入り、東区スポーツセンターで指導員のかたわら、選手育成やアジア競技大会の準備にたずさわり、時には選手の練習相手も引き受けた。

ところで、あの拒食症は嘘のように完治した。周りの環境、ストレスからくる重圧から解き放たれると人は、持って生まれた〝再生力〟で元に戻ることのいい事例だと、話を聞いて筆者は改めて思った。

西区スポーツセンター（以下西スポ）について

▼西スポは、広島商工センターの東端広島南岸道路の上り線わきにある。1981年（昭和56年）広島市に8ケ所ある内の2番目に設立され、温水プール付きでは一番目に設置。また運動場が隣接されているのは西スポだけである。施設所有者は広島市、指定管理者として公益財団法人広島市スポーツ協会が管理運営している。▼1966年（昭和46年）に始まった西部開発（現商工センター）にともない、御幸川口を挟んだ扇町に広域下水処理場（現西部水資源再生センター）の建設が計画されたが、処理水の放流が広島湾であり、地域住民の強い反対があった。▼広島市は当時スポーツ振興に力を入れており、見返り案として市のスポーツセンター建設誘致と地域住民（草津小学校区、庚午小学校区）に対してプールの割引利用（当初は無料）ができることで、浄水場と西スポが建設された。▼現在の利用団体約70組。コロナ禍前は年間16万人で、8万人台まで落ち込んだが、次第に利用者が増えて、昨年度は12万人まで回復した。職員数は館長を含め20人。

館長に昇格

前任者梅田館長の後を受けて、末廣さんは今年4月から昇格して第18代館長として全責任を負う任務に就いている。入協以来、安佐北区スポを皮切りに東区スポ、安芸区スポなどに勤務したのち、4年前の2019年4月に西スポに赴任し、主にコーディネーターとして、地域のスポーツ振興指導を担当してきた。

カエルの子はカエルにはならなかったが

広島に帰ってから、広島市卓球協会理事を恩返しと思い引受、プライベートでは卓球のクラブチームHTCで60名余の仲間と卓球の試合や練習、カープ観戦を楽しんでいる。同じ卓球仲間で知り合った亡ご主人との間に、一男二女をもうけるも、「石川夫妻との違いはどの子供も卓球に興味を持ちませんでした（大笑）。でもそれぞれの道を目指して頑張っていますよ」。

（編集　倉田和峰）

末廣令子
（すえひろ　れいこ）
広島市西区スポーツセンター
（広島市西区庚午南二丁目41－1）
広島市東区中山中町在住　1963/8 生れ
県立松永高校、福岡大学体育学部86年卒。岐阜・十六銀行、89 年広島市スポーツ協会、各区スポーツセンター経て19年西スポ赴任、23年4月館長就任。　家族：夫、一男二女

左：西スポ全景

上：広島市に転居した旧姓高草だった頃（1990年）

バランスボールに腰かけて執務中の末廣館長　アスリートは常に体幹を鍛える

右：ラケットの持ち方伝授

左：石川選手の実母久美さん（左）と

左：末廣ファミリーも達の七五三のお祝い

東四国国体にコーチ兼選手で出場（1993年）

右：広島市卓球リーグで、HTCが優勝